第６章

「勝沼のブドウ畑及びワイナリー群の文化的景観」の構造

第１節　文化的景観の特性

１.はじめに

本章では、「勝沼のブドウ畑及びワイナリー群の文化的景観」の構造的な把握を試みる。そのため本節では、前章までの多角的な視野からの論考をふまえ、文化的景観の景観的特性を、自然、歴史、生活・生業の３つの側面に分けて捉える。そのうえで、第２節ではそれらの特性によって形成された土地利用に基づく一定の特徴を示す景観単位に区分し、第３節では文化的景観を構成している諸要素を景観構成要素として提示することとする。

２.自然的特性

勝沼地域は、甲府盆地の東端に位置する。地域東部には大菩薩山系西側の山々から連なる柏尾山（標高 739 m）が突き出し、中央部には柏尾山南麓で深沢川と合流して西流する日川が扇状地を成し、西部には平地が広がる。このあたり一帯は、主として砂岩、泥岩、粘板岩から形成される四万十帯に花崗岩類が貫入する地質を示す。そのため、山間部の砂岩・泥岩が多く分布するところが浸食されて現在の起伏が形成され、川が運搬した砂礫が堆積して谷口より下に扇状地を、さらに下に平地を築いた。扇状地では礫を多く含み、水はけの良い土地となる。

盆地は一般的に、海岸部と比べて気温の日較差や年較差が大きく、降水量も少ない内陸性の気候を示す。勝沼地域も同様であるが、これに加えて、東部の山からの冷涼な局地風が谷筋を通って流れ込み、夜間の冷え込みをより厳しいものとする。この風は笹子峠から吹きこむことから、当地では笹子おろしと呼ばれている。

こうした果樹に適した自然的特性は、山腹より西向きに盆地を見下ろせる見晴らしの良い地形となって景観に現れ出ている。

勝沼地域には、また、甲府盆地に面する山腹からの湧水を集めて形成される比較的水量の少ない川が、日川の北側及び南側に西流している。この２本の川は、どちらも田草川と呼ばれている。勝沼地域は、南方に石尊山（標高 531 m）などの山々を擁することから、田草川（南）と田草川（北）の間には 100 ～ 150m の標高差がある。そのため、日川が形成する河岸段丘の南側断崖頂部からは田草川（南）に向かって上り斜面となり、北側断崖頂部からは田草川（北）に向かって下り斜面となり、その勾配は西側ほど緩やかとなる。

田草川（北）の水量は灌漑には心許ないことから、勝沼地域では早くから深沢川又は日川上流部にセギ（堰）を築き、水路を敷いて生活用水及び灌漑用水としてきた。日川南岸では、川に平行して幹線となる水路を配し、水路網が築かれた。一方、日川北岸では、断崖上の最も高い位置に甲州街道が東西に敷かれ、沿道の町場に幹線となる水路を配し、田草川（北）に水を落とすように水路網が築かれた。このような中で、水利条件の良いところは水田とされ、悪いところは畑地とされた。

ブドウ栽培は昼間の日照条件がよく、局地風の影響を特に受け、昼夜の寒暖差が大きい鳥居平、扇状地の土砂堆積物が多く、水はけの良い上岩崎では、すでに正徳年間（1711 ～ 1716）にはブドウ畑が配されていたことが知られる。

時期や経緯は詳らかではないが、こうした地形に規定される空間構成が明治に入る頃までには形成され、現代の土地利用の基礎を成していることは、地質や気候などの自然的条件がつくり上げる勝沼地域の景観特性のひとつである。

３.歴史的特性

前述のように、勝沼地域には日川北岸の段丘崖上部に甲州街道が整備され、沿道両側に矩形の宅地が配される一筋の町場が形成される。この周囲は農地とされ、扇状地の地形に合わせた不規則な道路網が現在まで引き継がれている。

甲州街道沿いは勝沼村の範囲、すなわち東は柏尾村境から西は等々力村境までが勝沼宿とされたが、等々力村にも町場が伸びていたことがわかる。

宅地の奥行きは地形に応じてまちまちである。かつては扇頂部側の見晴らしがよい勝沼宿東部に統治上重要な施設が置かれており、中世には武田家分家の居館が、近世には本陣及び脇本陣２ヶ所が置かれた。

勝沼宿は、本陣及び脇本陣付近に大規模な旅籠が集まる宿場町であったことがうかがえるが、近代には一帯の流通・往来の拠点として商家主屋や土蔵、旅館が建つほか、近郷の商店街として多様な小売商店が並ぶ町となった。ブドウの需要の高まりの中で、町場においても敷地の背部等の余地に棚をかけてブドウ栽培がおこなわれていた様子がうかがえ、やがて観光農園が現れるようになった。宅地とブドウ園が混じる現在の街道沿いの景観は、このように形成され、町家の形式をみせる主屋にも、通り土間をもつもの、農作業用の前土間をもつもの、その両方を兼ね備えるものがみられる。

町場の外に広がる農地は、江戸時代中期には水利のよいところを中心に水田が作られ、それ以外のところは畑地とされ、山裾や水はけのよい平地の一部でブドウが栽培されていた景観であったことは前述のとおりである。明治期には近世にブドウ畑であったところの周辺にブドウの栽培地が広がり、昭和初期には田を含むほとんどの耕地がブドウ畑となったことがわかる。また､明治期には、甲州街道沿いのほか、水利の悪い平地の一部などで桑が栽培されるようになり、明治後半には山裾にも栽培地が広がった。しかし、こうした桑畑も山裾を除き昭和初期にはブドウに転作され、勝沼地域における桑栽培は急激に衰退することとなった。

甲州盆地では、扇状地の多くで果樹が栽培されているが、モモやスモモがほとんど混じることなく、広大にブドウ畑が広がるのは、勝沼地域のみにみられる特徴である。その背景には、近代以降の交通の発展や、国・県の奨励策とも相まったワイン醸造の展開がみられる。

交通の発展として特筆すべきものが、明治 36 年（1903）の中央本線開通及び大正２年（1913）の勝沼駅開設、ならびに昭和 33 年（1958）の新笹子トンネル（新笹子隧道）開通である。前者により青果、ワインともに輸送の迅速化と出荷圏の拡大が図られることになった。また、後者は「ブドウ狩り」を目的とする観光客の獲得に繋がり、観光ブドウ園の増加をもたらした。

勝沼地域でワイン醸造が本格的におこなわれるのは明治 10 年（1877）の大日本山梨葡萄酒会社誕生からである。明治 21 年（1888）にはその後継として甲斐産葡萄酒醸造場（のちの大黒葡萄酒株式会社）が開業した。大正３年（1914）には山梨県内の醸造免許の３分の１が岩崎に集中するほど、ワイン醸造が活発になっていた。さらに昭和恐慌の後は、ブドウ農家が個人で醸造免許を取得してワイン醸造をおこなうようになり、日常の飲み扶持としてのブドウ酒文化が地域に広がった。戦時中には酒石酸採取を目的に免許の集約化が図られ、地縁による共同醸造（ブロックワイン）がはじまる。こうしたブロックワインは戦後に会社組織になっていった。こうした近代以降の歴史をもつワイナリーと戦後に開設されたワイナリーが点在して多数分布していることも当地の顕著な景観的特徴であり、前者の中に養蚕農家の建築を改造したものがみられる点も独特である。

４．生活・生業上の特性

勝沼地域では、基幹産業であるブドウ栽培により、東側の山地の斜面地から西側の扇状地由来の平坦地まで一面にブドウ畑が広がっている。歴史的に栽培されている品種は甲州種などであり、棚栽培によっておこなわれてきた。戦後の品種改良や栽培技術の進化、消費ニーズの変化により、栽培品種はデラウェア、巨峰、ピオーネ、シャインマスカットなど多種に及んできているが、棚栽培が踏襲されている。ただし、近年、ワイナリーが手がける垣根仕立栽培もおこなわれつつある。

傾斜地の耕地は、畑作、桑栽培などのために段状に造成をした時の状況を､石積みを伴って残す。傾斜地のブドウ棚はこうした農地数枚分に及んで一つの棚がかけられることが多いため、葉が茂る春季から秋季にかけては一面の葉が勝沼地域を覆い、葉をつけない冬季には農業の変遷を伝える石積みを現わす。特に葉が茂る期間には、春季の新緑、夏季の濃緑、秋の紅葉が樹種によって異なるため、季節ごとのパッチワーク状の景観がみられ、この眺めが勝沼地域住民のアイデンティティ

となっている。

棚柱についてはかつてクリ材やネズミサシ材が用いられていたが、現在ではコンクリート柱が多く用いられている。棚をかける際の番線の張り方や巻き方にこだわりをもつ農家もある。また、近年では単管パイプによる簡易な棚も出始めている。

勝沼地域では養蚕神の信仰がかつてはあり、その遺構としての蚕影山石碑が残るが、ブドウ栽培やワイン醸造については、慈幣天羅不動、ボルドウ神社など一部の新興の民間信仰を除けば、信仰との結びつきは小さい。わずかに、神輿が練り歩く際の掛け声が「ブドウの豊作大当たり」となった（上岩崎）、ワイナリーにおける仕込みにあたって祈祷をおこなっている、かつぬまぶどうまつりでの収穫感謝祭の催行などが事例としてみられる程度である。

また、かつぬまぶどうまつりのフィナーレでは勝沼中学校の生徒（かつては青年団）が松明をもって町内を一周し、最終的には鳥居平に駆け上がり鳥居形に点灯する。もとは大善寺の送り火だが、無病息災やブドウの収獲に感謝する行事として地域で大切に受け継がれている。

（山梨大学菊地研究室・甲州市教育委員会文化財課）

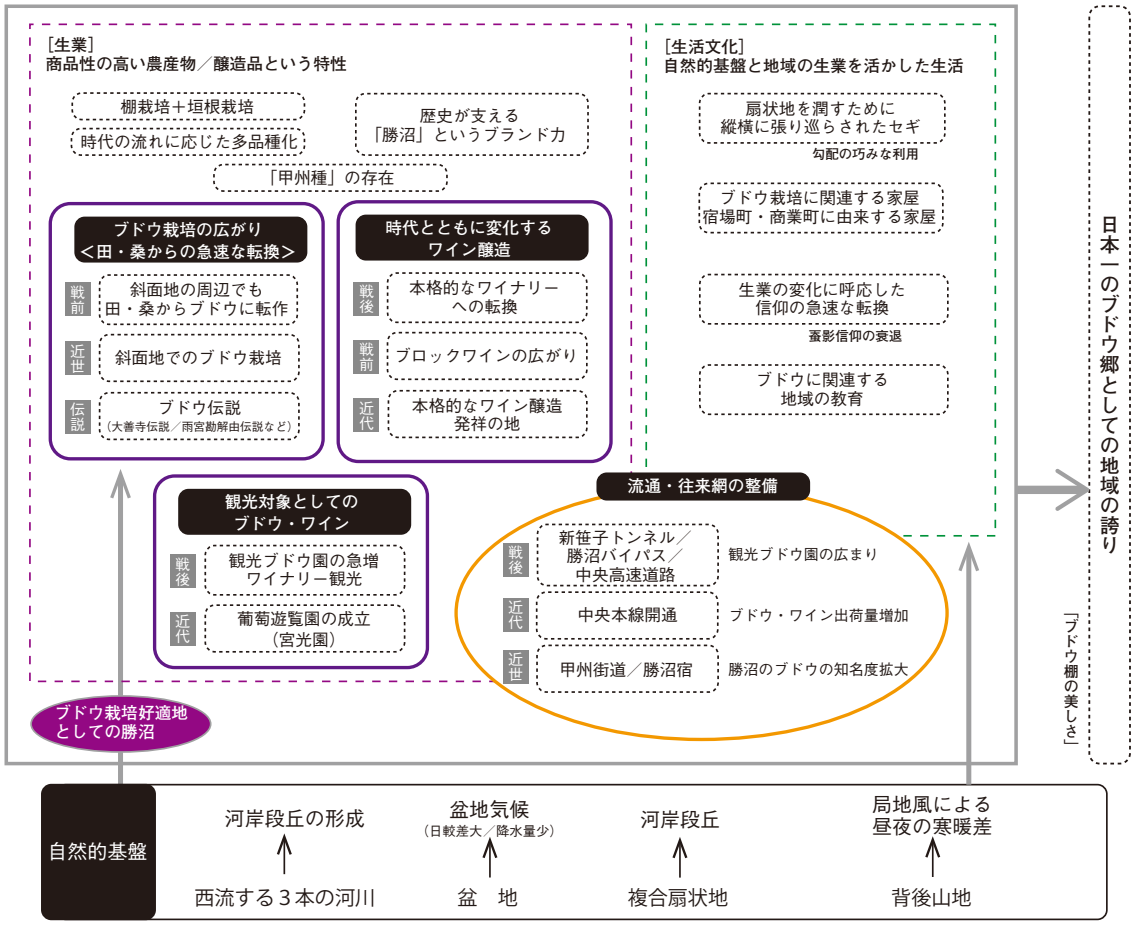

図１　価値の見取り図

第２節　景観単位

「勝沼のブドウ畑及びワイナリー群の文化的景観」を形成している特性については前節で位置づけたとおりである。本節では、これらの特性によって形成された土地利用に基づき一定の特徴を示す単位を景観単位として示す。

「勝沼のブドウ畑及びワイナリー群の文化的景観」については、前節において示された特性などを踏まえ、図２に示す７つの単位にわけて考えることが可能である。単位の区分は、エリアにおける土地利用とそれを形成している自然、歴史、生活・生業上の特性に加えて、地理的分布を加味して整理をおこなった。

地域特性の分類として町場、農村集落、農地、流通往来の４分類を設定した。前章までで指摘されたように町場や集落のなかにも農地は分布しているものの、エリアの総合的な性格として捉えて分類した。また、あわせて、平坦地、緩傾斜地、急傾斜地で地形的な特性を区分した。

図２　景観単位のイメージ

（１）甲州街道・勝沼宿エリア（図３）

甲州街道随一の規模を誇った近世の勝沼宿に由来するエリアであり、近代には商業町として発展した。街道東側（狭義の勝沼宿）では、近世には本陣･脇本陣（２ヶ所）や旅籠などが軒を連ね、近代以降には銀行、商店、観光ブドウ園などが営まれてきた。戦後は街道西部に観光ブドウ園が林立した。このように、ひとと物資の流通・往来において重要な役割を果たしてきた。

図３　甲州街道・勝沼宿エリア

街道南側では、街道東側では直後に迫る河岸段丘の段丘崖の影響を受け、屋敷背後の土地利用に制約が生まれた。そのため、大規模なブドウ畑の設置は難しく、小売等の商業が営まれた。他方、街道西側では広いスペースが確保できるため、背後にブドウ畑をもつ観光ブドウ園が広がった。

現在でも町場としての性格が強く、勝沼地域における流通や往来を考えるうえで重要な地域といえる。

（２）等々力・寺町エリア

勝沼宿の西側に位置し、萬福寺、またそれと関係の深い寺町などを含むエリアである。「甲州街道・勝

沼宿エリア」と連続し、街道沿いを中心としたエリアであるが、旧町村の違いに由来して氏神とする神社が異なるなど性格が異なっている。甲州街道沿いの景観は勝沼宿と連続するが、その北部では寺院とともに、その境内を含めてブドウ畑が広がっている。また、街道筋のみではなく、その南北にも宅地が広がり、街道沿いを中心に宅地が分布する勝沼宿とは異なる集落構造である。

（３）岩崎・農村集落エリア（図４）

日川の南側に位置し、近世から近代にかけて、ブドウ栽培はもとより、栽培技術の開発においてもその中心を担ってきた地域である。現在でも甲州種など、勝沼地域における伝統的なブドウ品種の栽培が盛んである。我が国有数の規模でワイナリーが集中する。

家屋と畑地が混在する農村集落としての様相を呈しており、ブロックワインに由来する複数のワイナリーも集落のなかに立地している。

図４　岩崎・農村集落エリア

近世までの主要街道はエリア北部の鎌倉道沿いであり、その周辺には現在でも寺院や信仰関連の石造物が点在する。また、近代以降の主要な街道となった祝村大道（県道田中勝沼線）沿いではかつては製糸工場が集中し、多くの水車が設けられた。現在でも当時の水路や水の堰止跡が残る。

また、近世から一貫してブドウ栽培をしている地域が多く、農地一筆あたりの面積が小規模である。

（４）勝沼農地エリア

勝沼地域の北西に位置し広がるブドウ畑を中心としたエリアである。ブドウ栽培は戦後にはじまり、それ以前は水田などが多かった。明治期の公図に比べて合筆が進んでおり、農地一筆あたりの面積が大きい。

戦後の高度経済成長期にハウス栽培などを積極的に導入した地域でもある。ハウス栽培自体は燃料の高騰などの影響で少なくなっているが、現在でもハウスの骨材を活かしたブドウ栽培がおこなわれ、棚のみのブドウ畑とハウスが混在する景観を呈する場所もある。

また、現在シャインマスカットに代表される大粒系のブドウ品種の栽培が盛んであり、甲州種やデラウェアを多く栽培する「岩崎・農村集落エリア」とは対照的である。

（５）河岸段丘低地エリア（図５）

日川の両岸に形成された河岸段丘一帯のエリアであり、日川から取水されたセギ・水路が複数みられ、地形の高低差を巧みに利用して、台地上に至るよう工夫されている。

段丘低部の河川敷から段丘崖の傾斜地まで、多くのブドウ畑が形成されている。明治 40 年代の大水害をきっかけに日川水制が畑のなかに築造され、現在でも部分的に残されている。

このエリアでは主として明治期の水害後にブドウ畑としての利用が進み、農地一筆あたりの面積が大きい。また、戦後に開業した比較的新しいワイナリーが複数立地している。

図５　河岸段丘低地エリア

（６）傾斜農地エリア（図６）

東側の盆地縁辺部に広がり、傾斜地でのブドウ栽培のあり方を示している地域である。特に、鳥居平は南西斜面ゆえに日照条件がよく、また、東側の笹子峠から寒冷局地風「笹子おろし」が吹き込むことで、昼夜の寒暖差が勝沼地域のなかでも特に大きい。斜面に立地する農地は石積みや玉竜などによって土留めをする、また、段差によって地面と棚のあいだが低くなってしまうため、棚は数段をひとつの単位として張られる。こうした棚の段差がブドウ畑の眺望に立体感を生んでいる。

鳥居平で「鳥居焼」がおこなわれ、ブドウシーズンの終わりを地域に告げる。

図６　傾斜農地エリア

（７）山地・鉄道駅・トンネルエリア（図７）

鉄道駅・トンネルエリアは、傾斜農地エリアの南東に位置する山地である。山地と駅、鉄道トンネル等で構成される。レンガ積のトンネル群は中央本線の開通に不可欠であった。中央本線の開通は、ブドウや醸造物資などを甲州街道を通じて馬で輸送していた時代から物流を劇的に変化させた。この点で、近代以降のブドウやワインの輸送、あるいは観光客を含むひとの往来を交通インフラという側面から支えたエリアとして位置づく。

（山梨大学菊地研究室・甲州市教育委員会文化財課）

図７　山地・鉄道駅・トンネルエリア

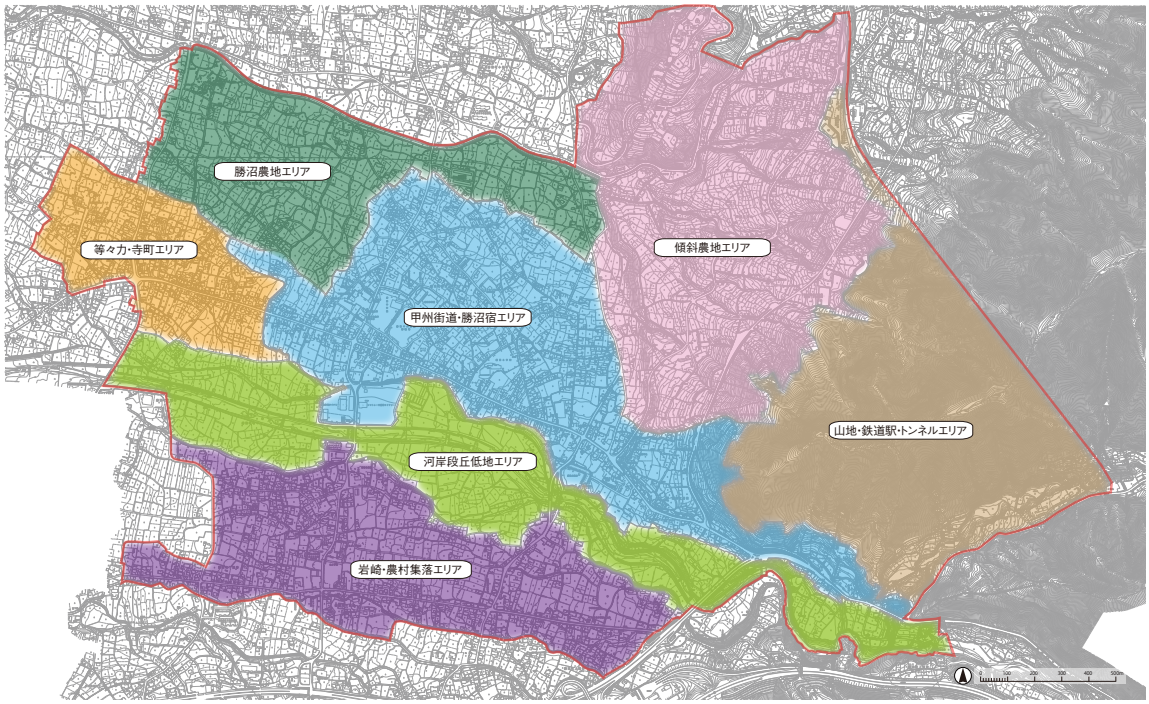

図８　景観単位図